

## 人生の贈りもの

### 必死に作った法案 つぶれて挫折

京大人文科学研究所所長 山室信一(63)

4

——1975年、衆議院法制局に入りました。

各党が手がける議員立法や内閣法の修正案などを作るのが主な仕事です。橋本(龍太郎元首相)さんがよく来られていましたね。勉強熱心でした。たばこを吸いながら、自分が作ることを提出法案に問題点はないか

細かい点を質問されていました。橋本さんはお父さんの代から厚生族でしたから、年金法などに詳しくかったです。

族議員という存在は批判もされましたが、専門家と同じくらいの知識を持たれていました。そのくらいやらないと、当時の自民党では頭角を現せなかった

んでしょね。社会党の多賀谷(真穂)さんなども、そんな自民議員の法案に対抗する修正案を出すため、必死に勉強されてました。

——事務方も忙しいですね。

会期末は徹夜に近いときもありました。ただ、休会中などに、調査のため国会図書館に自ら入れて書庫に収納されている本を読むことができました。本当に宝の山。必要な本をあれだけたくさん読めたというのは幸せでした。国会図書館の分館が国会議事堂の中にあります。中曽根(康弘元首相)さんも来られていました。本を読んでいる若い職員をつかまえては政治談議が始まるんです。政治への強い思いを感じましたね。

——法制局に入った翌76年、

ロッキード事件が発覚します。

事件を受けて、三木(武夫元首相)さんが金権政治再発防止の法案作りに着手されました。

法制局内のチームに私も入り、米国の情報公開法を研究して政治資金規正法や選挙法などの改正案を作りましたが、その後に激しい「三木おろし」が起きて廃案になり、三木さんと親しいとされた法制局長の川口(頼好)さんが辞任されることになりました。法制局は全ての議員に公平でなければならぬのに三木さんに肩入れしているときと

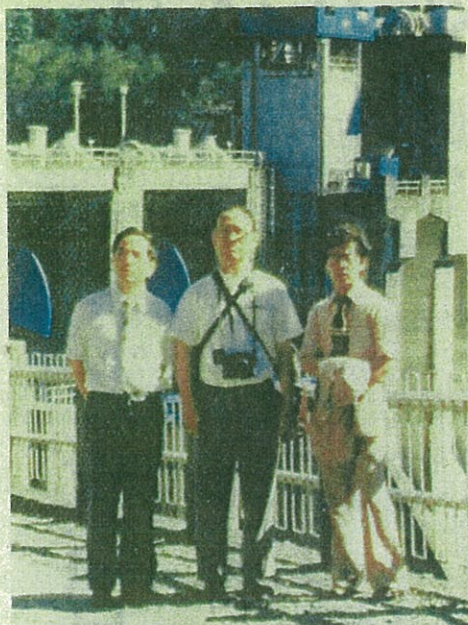
そのとき川口さんが言ったことを覚えていてます。「君も法制局にいれば、またこういうことが起きるよ」と。私自身、必死でつくった法案がつぶれた挫

折感もあって、川口さんの「なぜ日本の政治がこうなのか、研究しておく必要がある」ということばに押されるように法制局を3年で辞めました。

——思い切りましたね。

最後に背中を押してくれたのは妻でした。妻とは職場結婚でもわかってるので、大学に戻って研究したほうがいいと判断したんでしょうね。結婚後は仕事をやめていましたが、「私がバイトして働くから、若いころは自分に投資して」と言ってくれて。私は東大に助手として戻ったのですが、月給の半分近くを本代に使うこともありました。昔の古本は高かったですから。家計を圧迫したはずですが、妻は文句も言わずアルバイトで支えてくれました。そんな若いころの話をいまでも妻と振り返ることがあります。妻の理解には感謝しています。

(聞き手・河野通高)



衆議院法制局時代(右)。エネルギーに関する法律作成のため静岡県井川ダムを視察=1977年、本人提供